慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『アリーヌとヴァルクール』：あるいは感傷小説としての読者戦略
Sub Title	
Author	真部, 清孝(Manabe, Kiyotaka)
Publisher	慶應義塾大学フランス文学研究室
Publication year	2005
Jtitle	Cahiers d'études françaises Université Keio (慶應義塾大学フランス文学研究室紀要). Vol.10, (2005.) ,p.95- 109
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	この論文は、日本フランス語フランス文学会2005年度秋期大会(於:新潟大学)におけるワークショップ「サドにおける読者」(10月16日)での発言のために用意された原稿に加筆修正を施したものである。
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11413507-20050000-0095

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『アリーヌとヴァルクール』あるいは感傷小説としての読者戦略[1]

真部 清孝

サドが晩年を過ごすことになるシャラントンの精神病院に強制収容されたのが 1803 年、この年から翌年にかけての時期、拘禁生活の無聊を慰めるためか、彼は自らの著作集を計画立案している。この全 30 巻にのぼる著作集の冒頭に据えられる予定だったのが『アリーヌとヴァルクールあるいは哲学小説』である[2]。この計画では『ジュスチーヌ』、『閨房哲学』、『ジュリエット物語』といった匿名で出版された猥褻な作品群への言及はいっさいなされていない。著作集を企画したサドの意図は明らかで、そこには、匿名のポルノグラフィ作家ではない公の作家としてのサド、一般読者あるいは公衆・公論といったものを意識した作家としての彼の戦略を見なければならないだろう。このような読者戦略において、『アリーヌとヴァルクール』という作品は重要な位置をしめていたのだ。

『アリーヌとヴァルクール』の出版は 1795 年だが、この時期のサドは、

---

[1] この論文は、日本フランス語フランス文学会 2005 年度秋期大会（於：新潟大学）におけるワークショップ「サドにおける読者」（10 月 16 日）での発言のために用意された原稿に加筆修正を施したものである。

[2] この著作集の計画は『文学的覚書』のなかに見ることができる（*Œuvres complètes du marquis de Sade*, Paris, Cercle du livre précieux, 1966-1967, t. XV, pp. 33-34）。この計画から遡ること約 15 年、1788 年 10 月 1 日の時点で作成された著作一覧表でも、『アリーヌとヴァルクール』は小説作品の筆頭にあげられている（« Catalogue raisonné des œuvres de M. de S*** à l'époque du 1er octobre 1788 », *ibid.*, t. II, p. 266）。

後に確立される残虐な場面を好んで描くポルノグラフィ作家というイメージをもって見られてはいなかった。1791 年に『ジュスチーヌあるいは美徳の不幸』を匿名で出版してはいるが、この猥褻作品が彼のものであるとの認識はまだ一般には浸透していなかったようで[3]、むしろ作家としては無名に近かったと思われる。

『アリーヌとヴァルクール』のタイトル・ページには作者の名前として「市民 S*** (Citoyen S***)」とイニシャルのみが記されている。また、エディションによっては、そのイニシャルさえ表記されていない。当時の小説作品が匿名あるいはイニシャルのみを記して出版されることが多かった事情を考えると、このこと自体はそれほど奇妙なことではないのだろうが、この匿名性はサドの猥褻作品群が名無しで出版されたこととは意味合いを異にする。猥褻な作品群の作者であることを生涯にわたり否認しつづけたサドだが、『アリーヌとヴァルクール』に関しては、各方面に熱心に売り込んでいた様子が彼の書簡などから分かっている[4]。また、1800 年に自分の名前を入れて

---

[3] 例えば、*Correspondance littéraire* で Meister は、1794 年のフィラデルフィア版『ジュスチーヌ』の作者としてラクロと「サド伯爵とかいう人 (un certain comte de Sade)」の二人の名前をあげている (Cf. Sade, *Œuvres*, Paris, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, t. II, 1995, p. 1211)。

[4] 出版業にたずさわるプロフェッショナルとして、サドはこの小説の出版を次のように告知している (Lettre à Lions puîné, 27 août 1795) : « On vous donne avis, citoyen, qu'il paraît un ouvrage ayant pour titre *Aline et Valcour, ou le roman philosophique*, huit volumes in-18, beaux caractères, orné de seize gravures ; à Paris chés la veuve Girouard maison égalité ; prix du marchand 100 livres broché.

« Les exemplaires s'enlèvent avec une rapidité qui doit vous engager à vous presser, dans le cas où vous désiriés de vous en procurer un [...]. » (*Lettres inédites et documents*, éd. par Jean-Louis Debauve, Paris, Ramsay/Jean-Jacques Pauvert, 1990, p. 337) また、ある書籍商にサドが書き送った手紙には次のような売り文句が並べられている : « *Aline et Valcour ou le roman philosophique*, l'ouvrage le plus

出版した中篇小説集『恋の罪』のタイトル・ページには、「『アリーヌとヴァルクール』の作者」という自己紹介が付されている。つまり、公の作家としてのサドは、首尾一貫して『アリーヌとヴァルクール』を自分の代表作であると見なしていた、少なくとも一般読者にはそのように印象づけようとしていたのだ。

それでは、自分の代表作と見なしていた作品をもってサドは読者といかなる関係を取り結ぼうとしていたのか。この論文では、読者の目にもっともつきやすい『アリーヌとヴァルクール』のパッケージ部分、すなわち書簡体によって構成される感傷小説という側面に焦点を絞り、作家としてのサドの読者戦略を見ていきたいと思う。この小説が感傷小説としてどのように読まれうるのか。また、そのような読書体験をとおして、当時の読者が『アリーヌとヴァルクール』というテクストと取り結んだであろう関係を探っていこうというのだ。

72 通の手紙で構成されるこの書簡体小説は、そのタイトルが示すとおりアリーヌとヴァルクールの悲恋物語がその核となっている。アリーヌは、邪なたくらみを抱く父、ブラモン法院長から気に染まない縁談を強要される。それに端を発するブラモン一家の悲劇、何人かの登場人物が命を落とすことになる家庭悲劇が小説全体の枠組みをなしている。物語の途中では、生き別れとなっていたアリーヌの妹レオノールが、恋人のサンヴィルとともに登場、いくつかの大陸を股にかけた彼らの冒険物語が挿話として語られる。この部分は、挿話と言いつつもその分量は小説全体のほぼ半分を占め、しかも構成上、作品の中心部に嵌め込まれているので、この冒険物語とブラモン一家の

---

extraordinaire, le plus fort, le plus intéressant, le mieux écrit qui ait paru depuis trente ans méritait bien qu'en l'insérant dans votre catalogue, vous l'honorassiez du petit bout d'éloge dont vous avez gratifié des livres qui ne valent surement pas celui-là. Cette omission suppose que vous ne l'avés pas lu, et voilà tout d'un coup deux torts au lieu d'un. » (Lettre au libraire Deterville, 2 mars 1796, *ibid.*, p. 352)

悲劇のどちらが本筋であるか分からないほどである。

これら複雑に絡みあう物語が書簡体小説という器に盛られているわけだが、書簡体という形式は、言うまでもなく 17 世紀後半から 19 世紀初めにかけて流行した形式で、ことに 18 世紀においては 1760 年代からリチャードソンやルソーの作品の大成功をうけ、読者のあいだでたいへんな人気を博すこととなる[5]。ある統計によると、『アリーヌとヴァルクール』が執筆された 1780 年代には年平均で 10 作品以上、多い年には 30 作品以上と 18 世紀後半のどの時期よりも多くの書簡体小説が出版されている[6]。サドがこのような時代の潮流、「読者の期待の地平」といったものを認識していたことは間違いない。

実際、『アリーヌとヴァルクール』においてサドは読者の存在を強く意識している。「編集者序文」では「読者の好奇心を掻きたてること（exciter la curiosité du public)」(388[7]) が重要な眼目であることが宣言され、読者の興味をそそる売り文句が縁日の香具師の口上よろしく並べたてられる。読者の反応を意識したこの姿勢は、『アリーヌとヴァルクール』の執筆当初から一貫している。バスチーユに監禁されていた 1780 年代、サドが当時の文学界の最新情報や読者の動向に怠りなく注意をはらっていたことは、蔵書目録や妻たちとの手紙のやりとりで言及される書籍のタイトルを見ればわかる。こ

---

[5] 書簡体小説については、特に次の文献を参照：Laurent Versini, *Le roman épistolaire*, Paris, PUF, 1979 ; Lucia Omacini, *Le roman épistolaire français au tournant des Lumières*, Paris, Honoré Champion, 2003.

[6] Cf. Angus Martin, Vivienne G. Mylne, Richard Frautschi, *Bibliographie du genre romanesque français. 1751-1800*, London/Paris, Mansell/France Expansion, 1977, pp. XLV-XLVII.

[7] 『アリーヌとヴァルクール』からの引用はプレイヤッド版（Sade, *Œuvres*, Paris, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, t. I, 1990）からおこなう。この論文でなんらの断りもなくアラビア数字が記されている場合は、このプレイヤッド版のページ数である。

の時期のサドの読書傾向を分析した Haisoo Chung によると、小説では意外なことに感傷的な傾向の作品、一般には roman sentimental とか roman sensible と呼ばれるもの、具体的にはアベ＝プレヴォ、ロエゼル＝ドゥ＝トレオガト、タンサン夫人、リコボニ夫人、デュクロ、ドラ、バキュラール＝ダルノといった作者のものを数多く読んでいたようだ[8]。

ルソーの影響もあって、感受性を称揚する叙情的な小説が数多く出版され市場に溢れていた時期である。この種の作品の代名詞でもあるバキュラールの作品について、グリムは *Correspondance littéraire* のなかで「お針子や婦人服店の売り子のあいだで大変な人気を博している」とし、その流行は「小間使い女」のあいだにも広まろうとしていると述べている[9]。グリムはバキュラール作品の内容には眉を顰めつつも、その人気には驚嘆してみせる。このグリムの証言の真偽、「お針子や婦人服店の売り子」といった社会階層が実際にこれらの小説類を読んでいたかどうかはともかく、グリムからこのような感想をひきだすほどに、感傷小説群は、従来の小説の読者とされる裕福で知的にもそれなりに洗練されていた社会階層から、「お針子や婦人服店の売り子」そして「小間使い女」たちによって表象される社会階層へと、その読者層を拡大していったことがこの証言からは象徴的に読み取ることができる。印刷技術の発達、出版ネットワークの拡充、そして識字率の向上といった条件のもと、アンシャン・レジーム末期には印刷物を消費する人々が急速

---

[8] Haisoo Chung, « Lecture de Sade, prisonnier à Vincennes et à la Bastille (1779-1789) », *Cahiers d'histoire culturelle*, numéro 12 « Lectures, livres et lecteurs du XVIIIe siècle », 2003, cf. pp. 70-71.

[9] « D'Arnaud est devenu un des plus grands prédicateurs de vertu par la voie des romans à grands sentiments et à estampes ; il a beaucoup de vogue parmi les couturières et les marchandes de modes, et s'il peut mettre les femmes de chambre dans son parti, je ne désespère pas de sa fortune. » (*Correspondance littéraire, philosophique et critique par Grimm, Diderot, Raynal, Meister, etc.*, éd. par Maurice Tournaux, Paris, Garnier frères, 1879, t. IX, pp. 184-185)

に増大しつつあったことが様々な歴史研究により明らかとなってきているが[10]、感傷小説の流行はこのような読者層の拡大と無関係ではないだろう。

『アリーヌとヴァルクール』では感傷小説というスタイルが採用されたわけだが、そこには、このように拡大しつつあった読者層を意識した作家の戦略が潜んでいるのではないだろうか[11]。

サドが書簡体の感傷小説を構想していた段階で、明らかにモデルとして意識していた作品がある。それは、当時の大ベストセラーで、感傷的なジャンルの規範ともなっていたルソーの『新エロイーズ』である。『アリーヌとヴァルクール』と同時期に書かれた『小説論』の草稿のなかで「誰も真似することができない、いわば唯一無二の傑作である」と、サドはルソーの書簡体小説を手放しで賞賛している[12]。サドにとってルソーとは、他のどの作品でもなくまず『新エロイーズ』の作者としてあるのだ。1800 年に発表された『小説論』では、

> Rousseau [...] traita le roman d'une bien autre façon. Que de vigueur, que d'énergie dans l'*Héloïse* ! [...] l'Amour traçait de son flambeau toutes les pages brûlantes de *Julie*, et l'on peut dire avec raison que ce livre sublime n'aura jamais

---

[10] Robert Darnton や Roger Chartier の一連の研究のほか、次の文献も参照：*Histoire de l'édition française*, t. II, « Le livre triomphant. 1660-1830 », Paris, Fayrad/Promodis, 1990.

[11] とはいえ、サドが流行の感傷小説群を文学作品として高く評価していたわけではない。例えば、「アルノ氏の生気のない物語の健全ではあるが退屈な教訓（la morale aussi saine qu'ennuiyeuse des contes froides de M. d'Arnaud）」には冷ややかな態度しか示していない（« Avertissement » [version primitive de l'« Idée sur les romans »], *Les Crimes de l'amour*, éd. établie par Éric Le Grandic, Cadeilhan, Zulma, p. 503）。

[12] « À l'égard de la Nouvelle Heloise il fallait cesser de l'avoir en vue, c'est une sorte de chef d'œuvre unique qu'on n'atteindra point et dont toutes les copies seront détestables [...]. » (*Ibid.*)

d'imitateurs. Puisse cette vérité faire tomber la plume des mains, à cette foule d'écrivains éphémères qui, depuis trente ans, ne cessent de nous donner de mauvaises copies de cet immortel original ; qu'ils sentent donc que, pour l'atteindre, il faut une âme de feu comme celle de Rousseau, un esprit philosophe comme le sien, deux choses que la nature ne réunit pas deux fois dans le même siècle[13].

当時、雨後の筍のごとく現れた『新エロイーズ』の模倣作品を軽蔑するサドだが、ルソー作品のスタイルには賞賛を惜しまない。ルソーの人と作品に心酔し、エルムノンヴィルに詣でた同時代人の熱狂を素直に共有していたのであろう。サドの青年時代を色濃く反映させたと思われるヴァルクールの回想部分において、ジュネーヴに亡命した主人公とルソーの会見が設定されたりもしている（もちろん、サドとルソーが実際に会ったという事実はない）。この場面に象徴されるように、『アリーヌとヴァルクール』には『新エロイーズ』からの影響を随所に見てとることができる[14]。例えば、ヴァルクールは自分の感受性の過剰なまでの豊かさ、そして、それに伴う精神的な苦悩を次のような言葉で表現している。

Oui, madame, je l'avoue, trop de sensibilité est un des plus cruels présents que nous ait fait la nature [...]. (515)

---

[13] « Idée sur les romans », *ibid.*, p. 26.

[14] 『アリーヌとヴァルクール』におけるルソーの影響については、次の論文を参照：Sonia Faessel, « Sade, lecteur de Rousseau dans *Aline et Valcour* », *Studies on Voltaire*, 369, 1999, pp. 267-280. また、次の二つの論文も参照：Jean Biou, « Le rousseauisme, idéologie de substitution », in Centre d'études et de recherches marxistes, *Roman et Lumières au XVIIIe siècle*, Paris, Éditions sociales, 1970, pp. 115-128 ; Jean Garagnon, « La sensibilité comme idéologie de substitution de la noblesse dans *Aline et Valcour* », *Études sur le XVIIIe siècle*, 1984, XI, pp. 65-77.

この嘆きはサン＝プルーのそれに呼応しているかのようだ[15]。

> O Julie, que c'est un fatal présent du ciel qu'une ame sensible[16] !

サドはルソーから感傷的なスタイルを借り受ける。サドらしからぬこのスタイルだが、それは『アリーヌとヴァルクール』の重要な構成要素であり、ブラモン法院長夫人を中心に Vertfeuille の館に群れ集う美徳の登場人物たちは、このスタイルなしには構想され得なかったであろう。例えば、ヴァルクールの燃え立つような恋愛感情の表現は、『新エロイーズ』の「第二の序文」の次のような指示に忠実にしたがったかのようだ。

> Au contraire, une lettre que l'amour a réellement dictée ; une lettre d'un Amant vraiment passionné, sera lâche, diffuse, toute en longueurs, en désordre, en répétitions[17].

ここで言われている「冗漫」、「散漫」、「冗長」、「混乱」、「繰り返し」といった要素のどれひとつとして、アリーヌとヴァルクールのあいだで遣り取りされる手紙に見いだせないものはない。彼らの手紙の字面を見ればそのことは一目瞭然で、そこでは感嘆符、中断符、疑問符が過剰に使用されており、このような手紙の文体がどのようなものであるかは容易に想像がつくであろう。ヴァルクールは自分の文体や表現方法について次のように弁解している。

> Vous pardonnerez le style et les traits ; la tête qui dirige l'un est un peu malade, et

---

[15] 感受性に関するこの種のディスクールについては、次の論文を参照：Michel Delon, « Fatal présent du ciel qu'une âme sensible. Le succès d'une formule de Rousseau », *Études Jean-Jacques Rousseau*, 5, 1991, pp. 53-64.

[16] Rousseau, *La Nouvelle Héloïse*, *Œuvres complètes*, Paris, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, t. II, 1961, p. 89.

[17] *Ibid.*, p. 15.

la main qui trace les autres est encore bien faible. (1013)

この箇所に付された脚注でサドは次のような解説をくわえている。

Les répétitions, les négligences de cette lettre, prouvent l'état de Valcour, et doivent convaincre le lecteur qu'on ne lui en impose pas, quand on lui garantit la vérité de cette correspondance. (1013)

読者に対して手紙の「真正性」をことさら主張するサドだが、そこにはさかしまな意図が透けて見える。このような手紙の文体は、『新エロイーズ』を頂点とする感傷的な作品群の流行を横目に睨んでの文体模写、読者の好みを意識しながらのパスティッシュの成果なのではないだろうか。

ここで問題となってくるのが、どのような人びとがこの作品の読者として想定されていたかということだ。このことを考えるうえで、ひじょうに重要な資料が存在する。それは、サドから『アリーヌとヴァルクール』の原稿を託され、意見を求められたサド夫人が夫に書き送った手紙である[18]。この手紙は 1789 年の 5 月ないし 6 月頃のものだが、サド夫人の反応は端的に言えばナイーヴなもので、露骨な描写には眉を顰め、その描写がさらに過激な方向へとエスカレートする気配を感じとるや、そこから目を背ける。かと思うと、感動を誘う場面には素直に感動し、涙さえ流す。例えば、ブラモン法院長らから性的虐待を受けるソフィの身の上話について次のような感想を述べている。

J'en suis à la première aventure de Sophie. Elle m'a fait horreur, en la lisant, j'ai rougi pour l'humanité. Que sera-ce donc de la suite de ce roman ? [...] Le reste est touchant : j'y ai pleuré. Elle [Sophie] raconte bien ses malheurs avec une honnêteté et des sentiments faits pour intéresser à son sort et forcer même ceux à qui elle les conte à prendre ses intérêts avec chaleur. (1216)

---

[18] この手紙は『アリーヌとヴァルクール』のプレイヤッド版の巻末に収録されている（1216-1228）。

そして、サド夫人が流す涙は、Vertfeuille の館でソフィの身の上話に耳を傾ける人々が流す涙と混じり合うのだ[19]。

このサド夫人の反応は、『新エロイーズ』の読者がルソーに書き送った手紙をとおして Robert Darnton や Claude Labrosse が描きだしたある一部の読者層の反応を思い起こさせる[20]。感傷性を好み、感動的な場面を強く求めるこれらの読者、つまりナイーヴな読者層は、識字率が向上するにしたがった確実に大きなものとなりつつあった。読者の反応に敏感なサドが、このような新興の読者層を意識しないはずがない。そして、穿った見方をすれば、そのような読者の代表としてサド夫人をサンプリングし、彼女に原稿を読ませ、その反応を確かめていたと考えられなくもない。

ナイーヴな読者が物語をどのように読み進んでいくのか、小説家としてのサドはそれを熟知していたはずだ。彼らあるいは彼女らは、物語のなかの感傷的な登場人物、sensible な登場人物に感情移入しながら物語を消費していく[21]。『アリーヌとヴァルクール』では、このような感情移入の対象になり

---

[19] 実際、ソフィの物語の最後で聴衆一同は涙を流している：« Ici, les larmes coulèrent des yeux de toute l'assemblée ; Sophie, trop émue pour contenir les siennes, nous supplia de la laisser seule un moment. » (443)

[20] Cf. Robert Darnton, « Le courrier des lecteurs de Rousseau : la construction de la sensibilité romantique », in *Le grand massacre des chats. Attitudes et croyances dans l'ancienne France*, Paris, Robert Laffont, 1985, pp. 200-238 ; Claude Labrosse, *Lire au XVIIIe siècle. La Nouvelle Héloïse et ses lecteurs*, Lyon-Paris, Presses universitaires de Lyon-CNRS, 1985.

[21] Jean-Christophe Abramovici は、『アリーヌとヴァルクール』において感傷的な登場人物が読者にとって pôle d'identification の働きをしていることを指摘している（« Écrire et captiver. La lecture piégée d'*Aline et Valcour* », *Europe*, numéros 835-836, nov.-déc. 1998, cf. p. 39）。また、次の論文も参照：Anne Brousteau, « La perversion de la forme épistolaire », in Michel Delon et Catrina Seth (éd.), *Sade en*

そうな人物を形容する言葉として sensible という語が繰りかえし使用されている。それは読者の感情移入を誘う何かの呪文のようでさえある。感受性ゆたかな美徳の登場人物の視点をとおして、そして彼らとともに読者はある時は感動し、ある時は不安になり、ある時は憤慨し、ある時は涙を流すのだ。

登場人物への感情移入、そして心理的な一体化は読者に何をもたらすのだろうか。『アリーヌとヴァルクール』の物語構造に注目してみよう。ブラモン法院長夫人の領地である Vertfeuille に集う美徳の登場人物は単なる登場人物ではなく、物語の聞き手でもある。この書簡体小説には、途中から飛び入りしてくる何人かの登場人物によって語られる膨大な量の挿話が入れ子構造になって嵌め込まれており、構造上、これらの挿話は小説の中心部に位置しながら核心部分を形成している。これらの物語の聞き手が Vertfeuille に集う面々で、彼らの前でソフィなりサンヴィルなりレオノールが自分たちの体験を物語る。『アリーヌとヴァルクール』の読者は、感情移入により心理的に一体化している Vertfeuille の人々の視点からこれらの物語に接する構造となっている。

これらの挿話は、サドの猥褻な作品群とも通底しており、そこには過激な要素がふんだんに盛り込まれている。挿話が語られる場面を報告するデテルヴィルの手紙には、Vertfeuille の聴衆がどのように物語に反応したかということが逐一記録されている。ブラモン法院長夫人らは、猥褻な描写や過激な思想が開陳される場面になると必ずなんらかの拒否反応をしめす。それは、美徳の登場人物の背後にひかえ心理的に一体化しているナイーヴな読者が示すであろう反応として予想されるものでもある。例えば、性的虐待を詳細に語ろうとするソフィをブラモン法院長夫人は突如さえぎる。

> « Quelle indécence ! interrompit Mme de Blamont... Eh quoi ! les pères aux yeux de leurs filles !
>
> – Ma chère amie, dit Mme de Senneval, n'approfondissons pas ce gouffre d'horreur, cette infortunée nous apprendrait peut-être des atrocités d'un bien autre

---

toutes lettres autour d'Aline et Valcour, Paris, Desjonquères, 2004, pp. 32-43.

genre.

– Que savez-vous s'il n'est pas essentiel que nous le sachions ? dit Mme de Blamont… Mademoiselle, continua en rougissant cette femme vraiment honnête et respectable, je ne sais comment vous exposer ma question… mais n'est-il jamais arrivé pis ? » (437)

結局、彼女は「別のもっとおぞましい事ども（des atrocités d'un bien autre genre）」への好奇心に抗しきれず、頓挫した話を続行するよう指示する。語られる物語の流れを遮ってまで、このような幕間劇を挟みこむことになにか意味があるのだろうか。じつは、登場人物のこの手の拒絶反応は、過敏な読者の反応を先取りしながらシミュレーションするもので、作者は予想される読者の心理的な躊躇に先手を打ちつつ、登場人物とともに読者をさらなる物語の核心へと誘い込もうとしているのだ。

物語は美徳の登場人物たちの様々な拒絶反応を克服しながら進んでいく。場合によっては、ボレ伯爵のような仲介者の役割をになう登場人物の助けを借りることもある。レオノールが自分の宗教観を述べる場面を見てみよう。Vertfeuille の人々には受け入れがたい無神論的な宗教観を彼女が開陳してしまったがために聴衆一同が困惑、物語の続行が困難となる箇所がある。そこで、ボレ伯爵の出番となる。

Le comte vit bien que sa médiation devenait nécessaire à rétablir la paix dans les esprits. […] « Eh bien, dit le comte, cela posé, je crois que ce qu'il nous reste de mieux à faire, est d'écouter la suite des aventures de Léonore, et de l'engager plus que jamais à ne nous rien déguiser. Chères et charmantes amies, continua-t-il en s'adressant à Mme de Blamont et à son Aline, quand on a votre solidité, votre vertu, on peut tout entendre sans risques, et quand on a votre sagesse et vos cœurs, on plaint et pardonne la faute sans cesser d'aimer la coupable. » (764-765)

仲裁の労をとり説得を続ける伯爵は、レオノールと Vertfeuille の聴衆との仲裁者であるだけではなく、大胆な哲学的見解を披瀝するレオノールと思想的には保守的である sensible な読者とのあいだの仲介者でもあるのだ。作者は、

美徳を好む過敏な読者の反応をあらかじめ予測し、その拒絶反応を緩和する仕掛けをテクストの随所にほどこしている。読者は美徳の登場人物とともに難関を乗り越えつつ、サドが紡ぎ出す物語のさらなる深淵へと引き込まれていくのだ。

一部の大胆な筆致、露骨な表現の使用を正当化しながら、サドは最終的にそれらを読者に受け入れさせようとする。しかし、それが容易ではないことも彼は承知していた。ある脚註では、次のような呼びかけが読者になされる。

> Il y a beaucoup de lecteurs qui feront bien de ne la point lire, et les femmes surtout. (974)

また、別の脚註では、次のような注意書きが掲げられている。

> Nous prévenons nos lecteurs que la décence nous a contraints à élaguer beaucoup ces détails ; peut-être reste-t-il encore des choses fortes, il est impossible d'affaiblir par trop la teinte des caractères. (998)

これらの読者への呼びかけ（とりわけ、過敏な反応をしめすであろう女性読者がその対象となっている）は、読者の拒否反応を予想しつつ、それを緩和しようという意図だけで挿入されたものではないであろう。そこには、これからなされるであろう大胆な描写（« des choses fortes »）へと読者の好奇心を掻き立てようとする意図が見え隠れしている。このような作者のさかしまな意図を手助けする登場人物として、またもやボレ伯爵が登場してくる。物事の本質を隠蔽しようとする間接的で曖昧な表現方法に彼は異議をとなえる。

> « Pour de la pureté dans les expressions, tant qu'il vous plaira, interrompit le comte ; mais pour des gazes, morbleu ! mesdames, je m'y oppose ; c'est avec toutes ces délicatesses de femmes, que nous ne savons rien [...] ; si vous voulez profiter de ces récits, si vous désirez y apprendre quelque chose, il faut donc qu'ils

> soient exacts, et ce qui est gazé ne l'est jamais. Ce sont les esprits impurs qui s'offensent de tout [...]. Parlez, monsieur, parlez, que vos mots soient décents ; tout passe avec de bons termes ; soyez honnête et vrai, et surtout ne nous cachez rien [...]. » (554-555)

直截な表現を求めるボレ伯爵の訴えは、Vertfeuille に集う面々に向けられると同時に、その背後に陣取る臆病な読者にも向けられている。

このように、登場人物を介してテクストと読者が切り結ぶ関係を見てくると、当時流行の感傷的なスタイルが用いられた意図がしだいに明らかとなってくる。書簡体によって構成される感傷小説という枠組みは、感傷性を好んだ一部の読者層をおびき寄せる罠だったのだ。

ルクレチウスの『物の本質について』からひいたエピグラフでは、この罠の仕組みが謎解きのように解説されている。エピグラフはラテン語だがフランス語訳で引用すると、

> Les médecins quand il veulent donner aux enfants l'absinthe repoussante, enduisent les bords de la coupe d'un miel doux et doré afin que leur âge imprévoyant se laisse prendre à cette illusion des lèvres et qu'ils boivent jusqu'au bout le breuvage amer, non pas tant victimes que bénéficiaires du mensonge, car ils recouvrent ainsi santé et vigueur. (385, 1230)

苦い薬を飲むことを嫌がる子供のために、杯の縁に塗られる甘い蜜、それが感傷小説という縁取りというわけなのだ。このルクレチウスからの引用は、ブラモン法院長夫人がヴァルクールに書き送る手紙の一節にも利用されている。

> [...] l'illusion est à l'infortune, comme le miel dont on frotte les bords du vase rempli de l'absinthe salutaire présentée à l'enfant, on le trompe, mais l'erreur est douce. (506)

「幻想」という甘露に陶酔し、過酷な現実から逃避するブラモン法院長夫人。

彼女がのちに毒殺されることを考えると、手紙のこの一節は皮肉としか言いようがない。

それでは、「幻想」である感傷小説に飛びつく読者が飲み干すことになるのは良薬なのか、それとも毒薬なのか。

読者戦略として、サドは感傷的なジャンルの流行を最大限に利用する。それは、読者を誘いながら釣り上げるためのルアー（疑似餌）として用いられており、むしろ流行のスタイルの流用、さらには悪用とも言える性質のものである。疑似餌である感傷小説を巧みに操りながら、サドは『アリーヌとヴァルクール』の一部で提示される大胆な思想に読者を食いつかせようとする。この小説は「哲学小説（roman philosophique）」と銘打たれているが、サドは「編集者序文」でそのあたりの事情に触れつつ、読者を挑発してみせる。「序文」の結びの言葉を見てみよう。

> Tant pis pour ceux qui condamneront cet ouvrage, et qui ne sentiront pas dans quel esprit il a été fait : esclaves des préjugés et de l'habitude, ils feront voir que rien n'agit en eux que l'opinion, et que le flambeau de la philosophie ne luira jamais à leurs yeux. (388)

ここで言われる「哲学」は、啓蒙の世紀の批判精神を指し示しながら、『アリーヌとヴァルクール』と同じ年に世に送り出された『閨房哲学』が展開する「哲学」へと通じているのかもしれない。

感傷小説である『アリーヌとヴァルクール』を幻想の窓口に、危険な作品群へと読者を誘導しようとしていた。このようにサドの意図を邪推してみたくもなる。さかしまな読者戦略、この背徳的な読者教育は、「不道徳な教師」であるドルマンセとサン＝タンジュ夫人がおぼこ娘のウジェニーにほどこした見事なまでのリベルタン教育を思い起こさせはしないだろうか。